

愛宕山百韻を読み解く（一）

伊藤浩睦

俳句の母体となっている連歌という文芸は、鎌倉期から室町期にかけて大流行しました。安土桃山時代になると新しく登場した茶道に押されて、連歌師がやっていた政治的な周旋も茶人にとって代わられるようになって行きます。

連歌は和歌を上句と下句を別の人が詠んで、ひとつの物語として関連付けて繋いで行くものです。百句を一巻としましたので、五七五の句が五十句、七七の句が五十句で構成されます。内容的には大勢で繋げて作る和歌ですから、用いる言葉はやまと言葉に限定されています。

江戸時代になると、松永貞徳が俳諧を創設します。百句を作って行く約束事は連歌と同じであるが、連歌では用いない漢語や俗語、口語などを自由に使って良いと決めます。この俳諧が人気になると連歌は衰え、寛正二年（一七九〇年）に、当代随一の連歌師に相伝されてきた「花の下」の称号が、歌道の家元の二条家から俳諧師の加藤暁台に下賜されたのが、連歌消滅のひとつの基準になるとされています。

今回読み解く連歌は、天正十年（一五八二年）五月二十四日に明智光秀が山城国と丹波国の境目にある愛宕神社で興行した愛宕百韻です。愛宕神社のある愛宕山は、標高九二四メートルの山で、嵐山の渡月橋あたりから良く見えます。

七日後の六月二日に本能寺の変が起きており、この連歌で明智光秀が織田信長を討つ決意を披露したとされているので、発句だけは昔から良く知られています。ただ、決意の披露の伝承の真偽を連歌の評価から論じたものは今まで目にしたことがないので、我流ですが内容を読み解いてみたいと思います。

この愛宕山百韻は、明智光秀の本能寺襲撃をより劇的なものにしています。

勝軍地蔵が本地に垂迹したのが愛宕権現であるとされ、奈良時代に役小角が開いたとされる修験道の山で、当時は多数の堂塔が並んでいる、全国にある愛宕神社の総社でもありました。光秀は愛宕山に登り威徳院にて連歌会を興行しま

す。

明智光秀を施主として、連歌師の里村紹巴、愛宕山威徳院住職の行祐、愛宕山大善院住職の宥源、紹巴の弟子の里村昌叱に里村心前、連歌師の猪名代兼如、光秀の家臣の東行燈と光秀の長男の十兵衛光慶の九人でした。そのうち東行燈と明智光慶は一句しか詠んでおらず、かたちばかりの参加でした。

信長は、茶の湯が大好きで織田家の遊びは専ら茶の湯であり、連歌という古風な遊びは織田家の家風とは違うものでした。明智家以外の参加者は、愛宕山の住職二人と連歌師四人で、招待客といえるような人はいないやや寂しい顔ぶれでした。

発句は、施主である光秀が詠みます。脇句は客である威徳院行祐が、第三はこの座の捌き役である連歌師の里村紹巴が詠みます。これは連歌興行の約束ごとです。

ときは今天が下しる五月哉	光秀
水上まさる庭の夏山	行祐
花落つる池の流れをせきとめて	紹巴

これにどのような暗喩があるのか。